

人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援 (2)

山本理絵^{*1}・松川礼子^{*2}

1. 研究目的

本研究では、人間関係に困難を抱える幼児に対する支援について、安心して自分が出せ、異質性や多様性を受け入れやすい特徴をもっている異年齢集団の保育を通してどのような関係性が発展し、どのような援助方法が有効か、保育実践の継続的観察及び保育者等からの聞き取り調査の分析により明らかにする。そのさい、活動内容、参加の形態・方法、保育者の働きかけ等によって、おとなとの関係、子どもたちどうしの関係や、子どもの安心感、受容・承認、援助・自己調整、自尊感情¹⁾がどのように変化するか検討する。

先に報告した論文(1)では、3歳から5歳の子どもの異年齢クラスにおいて、全般的に知的発達に多少の遅れがあり集団に入ることが難しかった子どもを中心にとりあげた²⁾。異年齢のクラス集団では、周りの子どもたちも自分たちがされてきたように集団に入りにくい友達をも自然に受容しており、甘え－甘えられる関係、憧れ－憧れられる関係、認め合う関係、教えてほしい－教えてあげる関係の中で、その子どもも他児を受容・承認し、友達を援助しようとしたり、自己主張と周りの要求とを自己調整しようとしたりする姿がみられるようになった。また、その子どもも年長になるころからは年少の子をかわいがったり気にかけたりするようになり、甘えられたり、憧れられ、慕われる側になっていき、5歳児としての自覚や自己肯定感が育っていった。

その事例を通して異年齢保育においては、年長児等のやっていることが見えやすく、見通しをもちやすく、模倣しやすくし、年長児に支えられて安心感をもって意欲的に活動に取り組めるように援助すること、き

まった歌と振りで模倣しやく友達とのかかわりをつくりやすいわらべうたが効果的であること、また、興味がもて達成感がもてる活動や玩具（型はめ、パズル、粘土、ブロック）を用意すること、小グループで生活したりすること、できたことを実感できるようにほめたり、見て真似したり自分もやってみたいと思えるようになる環境を設定すること、活動内容や方法をわかりやすく伝え、保育者がやって見せたり一緒に行ったりすることが重要だということが示唆された。

本論文では、1歳から5歳までの子どもが同じ部屋で生活している保育園の事例を取り上げて分析するが、子どもたちどうしの関係については、前回の事例分析と同様、a.甘え－甘えられ・頼りにされる関係、b.憧れ－憧れられ、c.認めあう関係、d.教えてほしい－教えてあげる関係、e.要求しあい、鍛えあい、励ましあう関係などの視点から人間関係の発展をとらえたい³⁾。3歳児～5歳児の異年齢クラスと1歳児～5歳児の異年齢クラスとの違いについても検討したい。

2. 研究方法

B保育園の異年齢クラスにおいて月1回程度の観察及び保育者とのカンファレンスを2年以上継続的に行っており、その記録を分析する。異年齢クラスの子どもの人数は、1年目：19名（5歳児4名 4歳児4名 3歳児3名－10月1日入所児1名を含む 2歳児4名 1歳児4名）、2年目：19名（5歳児4名 4歳児4名 3歳児3名 2歳児4名 1歳児4名）である。

観察は、午前9時すぎごろから11時半ごろまで、通常の保育の流れの中で参与観察を筆者2名で行った。カンファレンスは観察の後1時間程度、クラス担任と

一緒に、注目している子どもについての1か月間の状況・変化や気になっていること、観察でみられたことなどを報告し、その意味や今後の方針などについて話し合った。観察・カンファレンス終了後に筆者らで記録を作成し、内容を確認した。

落ち着きがなく、トラブルになることが多かったI（男児・4月生まれ）を中心に、その変化を分析する。Iは、4歳児で入園した頃、遊び方がわからないことが多く、相手の気持ちに気づくことや自分の要求を出すことが難しかった。目についた物にひきずられて、言われたことなどを忘れてしまうようなことが多かったが、折り紙や数字が好きで、折り紙の本の何ページに〇〇が載っているというようなことはよく記憶していた。3歳児の(T君)とよく一緒にいることが多いが、折り合いがつけられずぶつかることが多く、大人の仲介が必要であった。

本論では、記録を①活動意欲・目的意識（見通し、認識、期待など）、②友達との関係を中心にその変化を分析する。前述の観点からの子どもの変化には下線____を、保育者の働きかけには~~~~を記した。

本研究の実施・発表にあたっては、対象の保育園及び保護者には承諾を得、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている。

3. 分析結果

2年間で、Iに質的な変化があったと考えられる時期で4つに区分し、それぞれの時期ごとに分析する。

1期（4歳児4月～10月）

(1) 目的をもって遊ぶことができずふらふらする

Iは、目の前のモノにひきつけられ行動をコントロールすることが難しかった。エピソード1のように、3歳児と一緒にじょうろで水を運ぶ行動を繰り返して遊ぶが、初めは砂で作った川を水がどう流れて行くのかを待って見ていられなかった。保育者が水を流すタイミングを待たせると、次第に順番を待って水を流し、ダムが崩れる面白さがわかってきた。

保育者が急に「片づけ」と言うと、やめてふらふらするが、予告があるとしばらく遊んで、気持ちをコントロールして片づけられることが多かった。

<エピソード1> 9月12日

Iは、外遊びの間、一人の男児（3歳児）と同じようにジョウロやペットボトルに水を入れては流すあそびを繰り返していた。

男性保育士が途中から参加し、周りにいる子どもたちを誘い川づくりを始めた。川の溝ができるとIはかまわず水を流す。保育者「もっと優しく！」「まだまだ」「いいというまで待って」を繰り返しながらどんどん川を掘り、やがてダムづくりに発展する。保育者が何を作ろうとしているのかIはわかりはじめたのか、やがて保育者が「Iくん待って、今ダムつくるから」「いいって聞いて！」の言葉が少しずつIに響き始めた。この間Iは、水をペットボトルにいっぱい汲んではダム現場まで運び、流すことを繰り返し8往復する。そのうちIが保育者に「流していい？」と聞くようになる。保育者が「まだまだ」と言うのに流してしまい、保育者に「だめー！！」と否定され少しびっくりしたようだ。しかし、また水を汲みに行き担任保育者に「ほらこんなに持っている」と見せて気持ちを切り替えていた。

その後、ダムが2箇所になってから、Iが保育者に「いい？」と聞き「だめー」と言われると待てるようになった。保育者がIにダムづくりに誘うが、Iはやはり水汲みと流すことがおもしろいのか、ダムづくりに参加はなかった。しかし、その後、Iは水をただ流すだけでなく流れる行き先に注目するように変化した。

次には、流す順番を決め守るルールを保育者が提案した。Iは順番に水を流すうちにダムが水の量で壊れるのを見て、「これ（ペットボトル）何番目？」と保育者に聞く姿がみられた。

遊び始めから30分以上たったところで、保育者が他用でいなくなるとIの遊びは自然消滅する。他の子どもも分散してしまい、片づけの時間となる。

〔考察〕

遊びたいことがみつからずふらふらすることが多かったIが、集中して取り組み始めた事例である。一緒に同じようなことを並行的にやってくれる3歳児がいたことで、刺激され、意欲が高まったのではないかと考えられる。Iにとっては、大人のダイナミックなあそびの介入とその間、遊びを面白くするための一定のルール（水が流れるのを待って見せる）を要求し、繰り返すことが大切ではないかと考えられる。

ダムが1か所2か所と増えるに従い、Iが保育者に「いい？」と聞き「だめー」と言われると待てるようになってきた。水を流すとダムで堰き止められることが視覚的にわかることで、Iに水を流す目的や自分の行動の意味がわかりやすくなり、面白さが伝わったといえる。

<エピソード2> 10月15日

朝の集まりでのどこに遊びに行くかの話し合いでは、I はとても落ち着いてうろうろすることなく、集中していることができ、保育者とやり取りができるようになってきた。話し合った時にはドングリを拾って「サンダルにどんぐりをくっつける」と言っていたが、公園に着くと砂場で遊んでいる子どもたちを見つけた途端、どんぐりのことは全く頭からなくなったように、すぐにJ 児と砂場へ向かう。他のクラスの保育者に「川つくろ!」と声をかけ遊びだす。

保育者「I くん 川どっちに曲がっていくの?」I は「こっち!」と川を作り始めるが、続かない。そのうちJ がI の背中に砂をかける。

I は「J くんが砂かけた!」と保育者に言うが怒らない。そしてその後I は「J くんが、ばかやろーって言った」(本当はJ は言っていない) と言う。

砂場でのあそびはその後、山を作りその上に白砂をかけるあそびに発展していく。担任保育者が参加することによってあそびはさらに続いていく。

その後、I は白砂を山の上にかけることに夢中で、上から砂を落とすので、近くにいた年長の女兒の目に入る。I は「クリーム、クリーム♪」と楽しそう。保育者に「どうしてかかっちゃったと思う?」と聞かれると、I 「早くやったから」と答える。保育者「そうだね。下からそっと掛けてね。」

しかし、その時はよいが、遊びにのめりこみ始めると、やはりさっき言われたことは忘れてしまい、また、上から白砂を楽しそうにかけている。

砂山を掘っていて崩れてしまったので、プリンカップに水を吸んできて砂山にかけたが、固めずにすぐに掘っていた。なぜ水をかけたか忘れていたようだった。

〔考察〕

担任によれば、それ以前は、目的なく遊んでいたが、先回園庭で保育者とじっくり楽しんだことで遊び方がわかったようで、まだまだ大人の助けが必要であるが、繰り返し遊ぶなかでさらにあそびを拡げていくようになった。砂はスコップを使い、手では掘らない(感触が嫌なのか、汚れるのが嫌なのかかわからないが、フィンガーペイントも嫌い)。

ダメと言われたことも、夢中になってしまうと、「白砂をすぐかけたいけど、気をつけないと近くの友達の目に入ってしまう」という、気持ちと行動のコントロー

ルが弱く、まだまだ自分の気持ち優先になってしまうようだ。

(2) 友達と折り合いがつけられないことが多い

3歳児Tと一緒にいることが多かったが、折り合いがつけられずトラブルになる事も多い。保育者の顔色を見て「ごめんね」と言うことが多かったが、次第に自分で考えて謝れるようになってきた。

エピソード2に見られるように、友達を意識して遊ぶというより、まだ保育者と一緒に遊んで楽しんでいる。友達から嫌なことをされても、直接反論するのではなく、保育者に訴えることが多い。J に使っていたスコップを持って行かれた時は、それほど必要でなかったからか、取り返さず「あとでかしてあげるからね」と声をかけていたが、言葉の使い方が少しずれている。

2歳の妹に対しては、くつがはけないでいると「先生、はかしてやって」など、妹に目が向くようになってきた。

2期 (4歳児11月～3月)

(1) 自分なりの目的意識をもち集団の中で主張する

① どこで遊びたいか主張する

朝の集まりで保育者が今日何をして遊ぶかを聞くと、I は公園で砂遊びをしたい思いがあり「〇〇公園」と主張する。保育者は自分の思いをみんなに言うように促す。また、自分より小さい子が起こすトラブルを見て、「そんなことしちゃダメだよ」と止めたりするようになった。

<エピソード3> 12月7日

朝、1, 2歳児グループのおやつが終わり、同じ部屋でクイズクイズ♪となぞな形式で(「名前に(り)のつく女の子♪」など) 出席調べが始まる。I は集中して答えている。

その後、畳の部屋に移動して絵本の後あそびの相談をする。

I 「I は外へ行きたーい」

保育者「それみんなに言わないと」

I 「園庭! 園庭!」

「玉ねぎ鬼したーい」と言う子もいる。

保育者「I くんは外で何をするの?」

I 「なんかする。まだ決まっていない」

その後園庭へ出ると、I は早速、バケツとスコップ

と漏斗のおもちゃを持って遊び始める。

保育者「何つくっているの？」

I「コーヒー屋さん」

保育者「おいしそう！」

I「パパコーヒー飲む」

そこへ、ボールを転がしていた妹のOちゃんが近づいてくると、Iは「コーヒー水入れたらできる。だから水いる！」と誘う。

大きい子グループは、お相撲ごっこ、玉ねぎ鬼、忍者ごっこなど、保育者も参加して、さまざまなあそびが展開されている。3, 4歳児でも交じっている子もいる。

Iの遊びに、Jが参加してコーヒー屋さんを続けている。車に乗った子が近づいてくると、「こっちへ来ないで」と言いながら場所を変えて続けている。一つのあそびにかなり集中して、周りの様子も見ながら継続している。Iは、鬼ごっこへは参加しなかった。

〔考察〕

Iは朝の会に集中して参加できるようになっている。クイズ形式で出席調べをしていることも、興味を惹かれ集中することを促す要因となっていると考えられる。事前に具体的に何をするかはイメージはできていないが、園庭で遊びたいということは主張できるようになってきた。外に出て、バケツ・スコップなどの物が目に入るとそれを使ってつもり遊びができ、ある程度継続できるようになっている。周りの他の遊びには参加しないが、周りも気にしながら、ぶつからないように配慮できるようになっている。

<エピソード4> 1月18日

朝、3, 4, 5歳児はリーダー保育者と紙芝居を見る。Iは一番前左端に陣取って保育者の読む紙芝居や、呼名、遊びの相談に参加している。

前日は手作りの凧を園庭で飛ばしたが、今日は公園で飛ばそうかと保育者が提案する。それに対して、Iは真っ先に「はい」と返事をして、トイレに行く。しかし、先に誰か使っていたのを見ると、すぐに出てきてしまう。その後、一人でジャンパーを着て、一番に外へ出る。外で待つ間、一番になろうと門の前を陣取することを気にしながら遊んでいたが、出発のときには一番最後に並んでいた。

公園で保育者が凧を配り、もらった子から次々に滑り台に上り、あげようと試みているが、Iは、目に

留った木の棒を持ち、地面にずるずる引きずって線をつくことに興じている。凧には目もくれないように見える。

Iは、Jと木の茂みの中において、秘密基地にみたてている。最初に見つけた棒は、しっかり持っている。二人で木の枝に登り、茂みから顔を出すことを繰り返していたが、自分の登っていた枝を、ちょっとした隙にJに登られてしまう。すると、Iは「ちょっとJ！おりてきて。たのしいことやるから。おりてこないよ、たのしいこと、はじまらないよ。」と枝を取り返そうと、言葉を駆使している。すると、Jは「棒貸して」と要求。すかさず「俺の棒だから」と断っていたが、次に「J！（枝から）おりてきて。ここに棒おいとくから、いつでもオレにイイ？って言って！」

〔考察〕

担任によれば、Iは、自分がこうと思ったことは、獲物を狙うように執着するが、トイレや列に並ぶ順番（先頭になりたい）についての要求などは、ふっと他に気がそれると それまでの要求はどうでもよくなるところがある。凧をあげることも、Iにとってはそれほどやりたいことではなかったと考えられる。あとで本人に聴くと、「今日はやらない」と決めたとのこと。「明日はやるけどね」と話す。

木登りや棒を持っていることに関しては、自分の要求である、「枝」を取り返すための言葉を駆使している姿がみられた。しっかりと自分の要求を通すためのやり取り（コミュニケーション）がみられるようになっている。

② 持って行きたいものを主張する

<エピソード5> 2月8日

3, 4, 5歳児は、朝の会（グループと座席指定）で「♪なーんだなんだ」の後、あそびの相談で、鬼からの巻物について話し公園へ行くことになった。身支度のできた子どもから公園に行くために園庭へ出る。

Iは、自作の剣を持っていくと主張する。

保育者「どうして持っていくの？」

I「鬼をやっつけるため」

J「剣をもっていくと切る真似でも、鬼が切られると思って、怒るかもしれないよ」

K「石とかはぜったい投げていかんよ」

I「石はぜったい投げていかん！」

保育者「でもI君が剣を持ってるだけでもまねっこ

だけでも鬼がにげていってしまうよ」

I「おに いないかもしれないよ」

保育者「剣もっていく？ どうする？」

I「持っていく」

〔考察〕

最初から、「だめ」ではなく、「どうして持っていきたいのか」Iの考えを聞き、他の子の意見も伝えあう場として丁寧話し合いがされていた。

Iは、自分の考えた事を言葉で伝えることで、相手がそのことを受け止め、考えてくれ、自分の言ったことが大事にされることの安心感を持ったようだ。

(2) ルールがわかりやすい集団遊びには参加し、友達の話を聞いて折り合いをつけようとする

Iは10月に3歳児のJが入園し、言葉で言えず、叩いたり蹴ったりする姿を見せたせいか、トラブルが起きると「そんなことしちゃダメだよ」と止める姿が見られるようになった。Iは、今まで自分の気持ちをコントロールすることができずにいたが、口で言えるようになってきて、Jと一緒にいることも多くなった。I自身のトラブルは少なくなってきて落ち着いてきた。

異年齢クラスの利点として、自分より小さな子が入ってきてしかも、今まで自分が起こしていたようなトラブルを起こして見せてくれることで、自分を客観的に見つめる機会になったのではないかと考えられる。

遊びにおいては、助け鬼の一種である氷鬼やバナナ鬼は、Iはこのときはまだ興味がなく参加しない。小さい子を保育者がオオカミになって追いかける遊びも、追いかけられると怖くなって「やめて!」と言う。目で見てわかりやすい色鬼やひょうたん鬼を導入すると参加してくるようになった。

<エピソード6> 1月18日

公園の秘密基地(木の茂みの中)で遊んでいる間、Iは他の子どもたちがやっている色鬼やかくれんぼはしないと書いていたが、Jが秘密基地から出て行ってしまうと、「棒、見張っていてね」と近くにいた観察者に頼み、かくれんぼに参加する。

一回目に、ジャンケンで鬼決め。自分が見つかったら、鬼ではないのに、まだ見つかっていないJを「J、いた?」と周りにいる人に聴きながら探す。ついにJを

自分が見つけると「次はオレが鬼に!」と一人で決めるようにするので、保育者に、「鬼になってもいいか皆に聴いてきて」と言われる。一人ひとりに個別で聴きに回わり、そこに保育者がサポートに入りIが鬼で2回目が始まる。

開戦どんが4, 5歳児が入り交じって隣の組と対抗で始まるが、Iは参加せず。ちらちらと見ていたようだが、別の場所(ぶらんこ)にいる。最後まで参加はしないが、終わって帰り支度を始めた保育者に、「どっちが勝った?」と聴いている。

〔考察〕

「開戦どん」は難しいといっているやろうとしない。しかし、前回、「目に見える遊びは、分かりやすい」というヒントを得て、「色鬼」に取り組んできた。色鬼やかくれんぼなどで人とかがわってあそぶようになり、あそびの内容に変化が見られた。かくれんぼもルールがわかり、やるようになった。2月の時点でもバナナ鬼はいやだと言っている。

ジャンケンも、負けるのではないかと不安であり、「海戦どん」は、ジャンケンの後、どこに移動すればよいのかIにとってわかりにくいので、入ってこないのだと思われる。陣地や助けの要素が入ってくると、動きが複雑になる。また、鬼ごっこは目標や終わりがはっきりしない点が、Iには難しいと思われる。しかし、同年齢のあこがれている児が参加していて関心はあるので、終わった後に保育者に「どっちが勝った?」と聴いている。

比較的ルールが簡単な色鬼やかくれんぼの体験を積み重ねていくうちに、3月には、ひょうたん鬼にIも参加して遊ぶようになった。最初に鬼になったら、手を伸ばして触ること、逃げる子は、ひょうたんの線を踏まないこと、という2つの約束を確認して遊び始める。Iは、とても積極的に参加していたが、線を踏まないという約束の記憶が持続できず、逃げることに集中すると線から飛び出してしまう。しかし、とても楽しそうに3, 4, 5歳の異年齢の仲間に交じって参加する姿が見られた。

<エピソード7> 3月12日

担任があそびの種類が描かれたミニホワイトボードを見せながら、あそびの相談をする。公園、外でボールあそび等の意見が多く出る。しかし、担任から今日は体調の悪い子がいるので、室内遊びにしたいと提案

がされた。多くの子どもたちがそれを聞き、それではと、ホールでボールあそび、トランポリンと意見を変えて提案し始める。

Iは、当初「遠い公園へ行きたい」と意見を出していたが、他児の「病気になるってもすぐ救急車が呼べないよ」という意見を聞き、「先に〇〇公園に行って、ちょっとだけ行って、またホールへ行って、ホールへ行ったら？」と意見を出す。

〔考察〕

この時期、あそびの相談の時、ミニホワイトボードを使うことが定着してきた。誰がどんなあそびを出したか、またどんなあそびが出ているのかが、視覚的に分かりやすくなった。Iは、意見を言う時、見通しを持ってしたいことを言えるようになってきた。他の子への配慮もしつつ、話ができるようになってきている。

3月にトランプをしていて、Jとぶつかった時は、「ごめんね」と自然に言っていた。自分の気持ちをみんなが聞いて受けとめてくれ一緒に考えてくれることから安心感をもてたと思われる。

3期 (5歳児4月～11月)

(1) 年長になり環境に慣れながら新しいことにも挑戦してみる

4月はしっかり者だった元年長が抜け(他のメンバーは変わらず)、担任も替わり(退職)、新しく1歳児の友達を迎えたことでクラス全体が落ち着かなくなり、保育者は生活を回していくのが大変であった。Iは、この時期、朝の集まりで皆の中に入らず大人の膝に乗っていることが多かった。そこを安心の拠点にして絵本や会話などの様子をみている。緊張があるとまばたきや首振りなどのチック的症状が出る。そのような中でも、新しいことにも挑戦してみる姿が見られた。

<エピソード8> 5月24日 午前

観察者が部屋に入ると早速Iが膝の上に座りに来る。しばらくじっとしていたが、その日の昼食用のエンドウ豆の皮むきに椅子に座って参加する。真剣にさやから豆を取りだす。調理の職員が来て、目の前で炊飯ジャーの中に、子どもたちが取りだしたエンドウ豆と塩コンブを入れ始める。米、エンドウ豆が入り、調味料を入れるのを興味深く覗き込む子どもたち。Iもその輪の中に入れて塩コンブを入れるのを手伝わせてもらう。

それが終わるとIが前日作ったというパッチン蛙を観察者たちに見せにくる。見せながら、車へのこだわりがあるので、車種、値段、何人乗りか、ひたすら話しまらない。

<7・8月の様子> (担任からの聴き取りより)

Iは、プール遊びでは、たらいで水あそびはするが、プールは嫌がって皆と一緒に入ろうとしなかった。いつも隣の組と合同で入っていたが、プール大会当日、担任が“自分の得意技を一人ずつ見せよう”と声をかけた。

Iはプールの壁にくっつき他児が順番に泳ぐのをじっと見ていた。年長児のYは顔付けが出来なかったのに、いるかジャンプを見せた。その姿を見て、Iも初めているかジャンプに挑戦。その後、自分の写った“いるかジャンプ”の写真を何度も見て、自分ができることに誇りを持っている。

9月初旬に“プールをつくろう!”という共同画に取り組んだ。B紙を3枚以上繋げ、クレヨンで色塗りし、宝を描こう!と、色や大きさなど考え、それぞれがずっと描き続けた。Iも一つの事に向かって途中で抜けてしまうことなく楽しみながら描き続けた。

また、自画像の取り組みでは、一斉ではなく、一人ずつ順番に描いた。一番目に描いた友達を見てIも、やり方がわかったのか、その場で4、5人が描くのをじっと座って待ち、描くことができた。

〔考察〕

これまで、大人や年上の友達に甘えることが少なかったIであるが、春は環境の変化もあり、大人に甘えることによって、安心感をもち、新しいことにも挑戦してみようという意欲をもつことができたのではないかと考えられる。

Iは水あそびは好きだが、プール遊びは2クラス一緒に行くことが多いせいか、誰が何をしているのかが見えづらく、何をしてよいかわかりにくかったのではないかと考えられる。プール大会で一人ずつ技を披露することで見えやすくなり、自分もその姿に憧れ、やってみようという意欲が出て、やってできたことで誇りをもつことができたと思われる。また、Mは、迷路、線、地図が好きで、人間を描くことは苦手であったが、友達が描くを見て、どのように描けばよいかわかり、取り組めた。友達の動きを見えやすくすることが重要であった。

(2) 小さい子の世話をしたり、一緒に遊ぶ年中児に指示したりする

① 食事場面

4・5月、子どもたちにとって生活のしづらさを感じ、食事場面で、ア. 待ち時間 イ. 配膳 ウ. おかわりの場面の見直しを行ったことで、ずいぶん落ち着いてきた。

ア. 待ち時間を減らす

今まで全員の子が座ってから、当番が配っていたが、待ち時間中のトラブルやまだ遊びたい子もいるなど、全員そろわることが難しく、待てない姿があった。そこで、全員で「いただきます」をするのをやめ、グループ単位に変更した。まだ遊びたい子には「先に食べていてね」と声をかけ、食べ始めるようにした。

イ. 配膳方法

当番が全員に配るのではなくグループ単位で配るように変更した。汁ものは大人が配り、ご飯とお皿は子どもが配る。そしてテーブルの真ん中に、おかずの入った大皿を置き、各自で自分の食べたい量をつけ分けることに変更した。繰り返すことで、自分の食べられる量を自分で選びとる力を育てたいと保育者は考えた。

ウ. おかわりの方法

今までは配膳台まで各自が取りに行き、好きなだけ食べていたが、この方法では見通しを持って他児の分を取っておくことは難しかった。そこで、テーブル毎に大皿におかわりを置いたところ、Iもおかわりしたがついている小さな子がいると、保育者の姿を想起して「自分で取っていいんだよ」と教えたり、スプーンで保育者の替わりによそってあげたりするなど、クラスの子のことを気にかけるようになった。

Iは、4歳児の時、給食を配りたがるが配るものが多くなっていくとわからなくなり「ない人!」と聞いていた。こうしたグループ単位の仕事にしたことでわかりやすくなり、Iも、2歳児に「この子だれ?」と聞くなど、人の動きに気づくことが増えた。また、3、4歳児が、1歳児の世話を焼こうとする姿が見られるようになってきている。Iは、妹のOが遠くにいても、何かあれば相手を突き倒してでも守りに走っていく姿が見られるようになる。

② 遊びの場面

異年齢の小グループをつくったことで、Iは、他の友達の様子に気づき、気に掛けることが増えてきた。以下のエピソードのように、忍者鬼に参加したり、自

然発生的なお店屋さんごっこをしたりするようになる。

<エピソード9> 5月24日

朝のあそびの相談では、前日からのあそびの発展か、今日は公園で忍者になって遊ぶことに決定する。Iは公園に着くと担当と一緒に4、5歳を中心にした「忍者鬼」に参加する。忍者鬼とは、樹木の間や細い道を伝って歩いたり、忍者になったつもりで茂みに隠れ、公園内にいる他児に見つからないように身を潜めるつもりあそびである。天狗（担任）が忍者を探しに行くが、忍者はいろいろな術を考え、天狗につかまらないように隠れ蓑の術を使って変身し、あそびが続いている。Iも10時から帰るまで、忍者役になり、石の術、葉っぱの術など、いろいろな術を考え出して4、5歳児と遊び続けていた。

〔考察〕

Iは4歳児ではオオカミに追いかけるのは怖かったが、天狗や忍者のイメージは楽しめるようである。ルールも複雑ではなく、ひょうたん鬼のように線からはみ出さないなどの厳密さはなく、ゆるいルールでごっこの的なあそびだったことが楽しめた要因ではないかと考えられる。保育者が入ってではあるが、Iは仲間を意識し天狗の一員として、コミュニケーションをとりながら遊び続けられるように成長している。

<エピソード10> 7月5日

朝の自由遊びで1歳児から5歳児が混じり合って遊びが展開されており、Iは、新聞紙で作ったトングを使用し、新聞紙を丸めたおだんごをトングではさんで畳の部屋の敷居に並べている。平行的ではあるがRも同様の遊びをし、観察者とやりとりする。そのうちIはドーナツ（フェルト玩具）の入ったケースを持ってきて、そこから出してだんごと一緒に並べ、「いらっしゃいませ。何がほしいですか?」とお店屋さんを始める。Jが抜けた後、Iはいつのまにか、観察者の膝の上に乗りながらお店屋さんを続けていた。

<エピソード11> 7月31日

園庭で、ホースで水飛ばし、水鉄砲、おもちゃの家の屋根に登り水を流すなど、IとJはずっと行動を共にしている。IはときどきJに「上から流せー」と水

の流し方や場所を指示している。Jは言われたことは気にしているようだが、自分のやりたいようにやっている。

<エピソード12> 9月11日

Iは、公園の東屋のようなコーナーで魚釣りごっこをしている。棒を見つけ、それで葉っぱをクジラに見立てて釣っている。そこへJも近づいて同じように遊び始める（Iと同じことをしたいようだ）。

〔考察〕

お店やさんごっこでは、まだ一人遊びで、大人としかやりとりできないが、それを見た4歳児Jが真似して並行的に遊びを始めている。園庭や公園で同じような遊びをすることから、Iはあそびの中で次第にJとのかかわりができていっている。

なお、10月には、Iはジャンケンがわかり自分が強いことに自信をもつようになり、鬼ごっこ「どろぼうとけいさつ」をやるようになった。役によって帽子の色を変えることにしたので、わかりやすくなったのだろう。バナナ鬼は、まだ「むずかしい!」と言って参加してこなかったが、その後、ルールを単純にしたら参加するようになった。

このようなことから不安が減ったのか、Iのチックはこの頃見られなくなった。不安な時は、洗濯ばさみやドミノを飛ばすと落ち着くようだった。

4期（5歳児10月～3月）

(1) 自分から米とぎをやると決めて慎重に実行する

<エピソード13> 10月25日

Iは朝の集まりの前の自由遊びの時間に、久しぶりにやりたいと言って米とぎをしていた。近くにいた保育者に「4合?」と尋ね、神妙な顔で水を4合の線まで入れて、炊飯器にセットする時も覗き込むように線を確かめていた。その後、疲れたのか床に寝そべりゴロゴロしながら木製のヘリコプターを寝そべったままの姿勢で眺めていた。

〔考察〕

部屋に1台ずつ家庭用の炊飯器が置いてあり、米とぎは、やりたい子どもがやることになっている（食べる分の半分は給食室で炊いている）。Iは4歳の12月に5歳児が米をといでいるところに近づき様子をのぞき

こんだことがあった。5歳児はIに水を入れさせてくれるが、Iが「どこまでお水やるの?」と他児と視線を合わさずつぶやくように言うので、5歳児もその場を離れており、その時はそのままウロウロしたままIの米とぎは終わりとなってしまった。それに比べ、今回は自覚的に水の量をしっかり聞き、慎重に水を入れセットすることができた。

(2) あそびの相談時にリーダー的行動をとる

Iは、あそびの相談をするときに、「○○いい人手をあげて!」とみんなに聞いて人数を数えるなど、リーダー的な行動をとるようになってきた。また、1歳児から頼られるようになる一方で、苦手な友達とは距離をとることもできるようになる。

<エピソード14> 11月21日

朝の集まりの前の自由遊びの時間に、4、5歳児が固まってあそぶようになってきたため、ゆったりおだやかで落ちついた状況になってきた。

Iは、朝の集まりの前に保育者和其他の組の部屋へ、一緒に公園へ行けるか聞きに行く。返事の代わりに手紙をもらって帰ってくる。担任に「皆に手紙のこと教えてあげて」と言われるが、何を言ったらよいのかわからないのか、視線も焦点が合わず、誰に言うともなく「もっらてきたよ」とつぶやく。誰に伝えたらよいかはっきりしないようだった。

朝の集まりでは、2、3歳児がずらりとベンチ棚に座り、「けっけっけ♪」と楽しそうに手遊びをしていた。Iたちも一緒に踊っている。そのあと、子どもが子どもの名前を呼んで出席調べる。とてもいい雰囲気、2歳児は堂々と4歳児は照れくさそうに、友達の名前を呼んでいた。Iは「まだ呼んでない子だよ」と保育者に言われると、考えて保育者の名を呼ぶ。4歳児のよく一緒に遊んでいるJに「Iくーん」と呼ばれ返事をする。

〔考察〕

朝のあつまりでは、とても楽しそうに参加していたが、この頃のIの様子は、聴き取りによると、興味のあることには集中するが、興味がないと座っていられない、興味があることが目につくとずっと動いてしまう、関連のあることが出てくるとまわりを気にせずしゃべりだしてしまうということがまだあったようだ。

また、上のエピソードの手紙の例にもあるように、言われたことが言葉のみでは理解できず「物」がないと何をすべきかわからない、目の前のことにとらわれてしまうということも相変わらずあった。他園との5歳児交流の時、今日楽しかった人？と聞かれるとよく考えずに反射的に「はい」と手をあげてしまい、前に出るように促され、何のために自分が呼ばれたのかわからないという顔をしていたようだ。今どのような状況であるのか説明してもらおうとわかるが、2、3歳児にもわかるような言い方が必要だとあらためて気づかされる。

さらに、Iは、自分の行動を否定されたり、きつい言い方をされると引いてしまうか、どうしてよいかわからなくなってしまうことがあった。上のような楽しい雰囲気の中では落ち着いて行動できている。

<エピソード15> 12月13日

朝のあそびの相談のとき、子どもたちが「園庭がいい」などと口々に発言していると、突然Iが立ち上がり、「園庭でいい人？」と聞き「はい」と手を挙げているこの人数を数え始めた。さらに「ずーと手をあげていて！」と促して「123・・・9」と数える。他児もその声掛けにきちんと応えている。

保育者が園庭は、他のクラスが使うので遊べなくなったことを伝え、改めてどこに行きたいか聞く。Iは「〇〇公園で走り回って、木登りしたい。」と真っ先に発言する。保育者が「Iと同じでいいという人～」と聞くと、「はい」という子が多いが、「なんでもいい」という子もいる。

意見がまとまらないので、保育者は、まだ何も言っていないJに聞くと、Jは応えるまで時間がかかったが別の公園に行きたいと言う。保育者は皆にJの思いを伝えながら、でも時間が少なくなってしまったからすぐに帰らなければいけないことを伝える。Iはその間、そのやりとりをじっと聴いている。Jの思いも発言してもらったが結局、Jが自分の意見を譲って自分たちの思いに合わせてくれたので、Iたち5歳児がJにかけより握手をして、「Jくんありがとう！」と言った。

〔考察〕

Iのこうしたリーダー的行動は初めて見られたようで、保育者も驚かされた一面であった。園庭が使えない理由が理解でき、ではどこで何をしたいか発言する

ことができ、違う意見にも耳を傾け、最後には折れてくれた4歳児の気持ちがわかり感謝している。

<エピソード16> 1月24日

朝の絵本の時間となると、皆がリーダー保育者の周りに座り、子どもたち全員が絵本の方向に向き集中し楽しむ姿が見られる。(ここ3カ月ほど前から、この集まりの時間が、1歳児も含めとても楽しい時間になってきている事が観察される。)

Iは一冊目、保育者の隣で手を保育者の膝に寄せ、背中をスッと伸ばす姿勢で絵本を見入っていた。2冊目、Jがリーダー保育者の近くに陣取るとIはすーっと身を引き、さりげなく皆の輪の中に移動する。そしてその場から絵本を食い入るように集中して見ていた。

欠席調べでは、「♪クイズクイズ♪」の歌に合わせ、あっているときは手をパンパンと二つ叩く方法で楽しく進む。「♪クイズクイズ、なーんのクイズ？ 今日のお休み」「〇〇くん」(パンパン)。次は「薬を飲む人？」などと問題が出され皆で楽しく確認していた。

公園へIは散歩車に乗って出発。帰りは、観察者と手を繋いで帰る。Iは病後のため、保育者から「散歩車に乗っていいよ」と言われ「5歳なのに乗っていいの？」と聞く。公園に着くと保育者と一緒に、散歩車に乗った1、2歳児は、木の茂みの中の空間を基地にしながら公園の隅でパーベキュウごっこを展開する。一緒に乗ったIも参加する。火がつきやすいように、「着火マン」と言いながら、木くずを集めている。見立てつमोरの世界に自分のイメージを持って参加している。

〔考察〕

欠席調べでは、このようなクイズ方式で手を叩くやり方なら、1歳児から参加でき、皆が楽しめる。Iは、小さいメンバーに対して、自分は5歳児だという自覚をもっている。この頃1歳児から「Iくーん」と頼られてうれしい気持ちが持てているようで、「折り紙折って」と持ってきてられると嫌がらずに「いいよ」と折ってあげている。保育者の言葉を聞いて判断しながら小さい子への手伝をする姿が見られるようになった。

1月から5歳児のみ昼寝を無くし、各おうち(クラス)の5歳児が一緒に遊ぶ時間「5歳児さんの時間」(1時～3時)を設定した。ぬりえ、折り紙など好きなあそび

をする時間となり、もともと折り紙が好きだったIは、そこでゆったりと手を使った活動などをして、自信を持って小さい子にやってあげることができているのではないかと考えられる。

一方、この時期トラブルを続発していたJに対しては、距離をとる方法も心得てきた。

4. 総合考察

以上のように、Iは、次第に自分のやりたい活動を意識し、主張できるようになるとともに、友達にも気づき、友達の意見を聞きつつ自分の意見を調整したり、集団の意見を調整しようとリーダー的にふるまうようになっていった。また自分より年下の友達にも指示を出したり、援助したり、譲ってくれたことを認め感謝するようになり、小さい子から頼りにされ自尊心が育っていった。

異年齢集団が及ぼした影響や保育者の手立てとしては、以下の点が重要だったと考えられる。

- ① 年下の子が起こすトラブルを見て、自分を客観的に振り返ったり、その子に注意することができた。
- ② 砂遊びや鬼ごっこ、プール遊びなどをやって見せたり視覚的にわかりやすくすることで意欲的に取り組むことができた。
- ③ 楽しく活動に取り組み、達成感や自信が得られた体験と、やりたいことを保育者が丁寧に聴き取り、さらに集団みんなにやっていいか聞くように促したことから、やりたい活動を主張することができるようになっていった。話し合うときは、出た意見をホワイトボードに書くなど、わかりやすくし、考えやすくした。
- ④ 一人で遊んでいても、年下の子どもが寄ってきてまねをして遊ぶことから、次第にかかわりが生まれ、リーダー的なかわりにつながった。
- ⑤ 異年齢の一定期間固定した小グループで食事をとるなどしたことから、他の友達に気づき、小さい子を気にかけるようになっていった。小さい子から頼られ、5歳児としての自覚も育っていった。

- ⑥ 朝のあつまりを、1, 2歳でも興味がわくようなやり方で行うことによって、クラス全員が集まって楽しく行うことができ、小さい子から慕われ頼りにされるようになっていった。

①と③は、同年齢集団でも行われることであるが、そのようにわかりやすくすることは、年齢差のある異年齢集団ではより重視される必要があるだろう。

⑥は、1歳～5歳の異年齢集団における特徴であろうが、とくに年度の前半、3歳未満児の朝の会や話し合いを3歳以上児と同じ時間に一緒にすることが難しく、別々に行うこともあった。どのような日課の作り方がよいのかは、今後の検討課題である。

今回の事例分析を通して、視覚的にわかりやすく提示することや小グループでの生活の重要性は前回の事例と共通して示唆された。しかし、論文(1)でも明らかになったような年長児のやっていることを見てやり方がわかるになるような場面は、Iが4歳児のときにはあまりなかった。活動内容の違いによるものとも考えられるが、今後さらに検討していきたい。

注

*1 愛知県立大学教育福祉学部教授

*2 名古屋短期大学非常勤講師

- 1) 山本理絵「異年齢保育で大切にしたいこと」『ちいさいなかま』No564 2011年9月号 pp.32-37
- 2) 山本理絵・藤井貴子「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援(1)」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第63号 2014年 pp.99-110
- 3) 山本理絵「異年齢保育の魅力」林若子・山本理絵編著『異年齢保育の実践と計画』ひとなる書房 2011年 pp.36-40

付記：本研究は科学研究費（2012～2015年度 基盤研究(c) 課題番号2453104 山本理絵研究代表）の助成による。研究に協力していただいた皆様に感謝します。